# 有機過酸化物・ニトロ化物の鉄管試験

水島容二郎・田中 幸雄\*

# 1. はしがき

不安定性化合物の感度測定法の一つに鉄管中に充塡 し一端で起爆し、試料が爆発するか、伝爆するかを検 する鉄管試験があり実用されている<sup>10-60</sup>。本法の特徴 は他の感度試験法すなわち落組感度試験法、発火点試 験法、緊擦感度試験に比して試料の量が 100倍~1,000 倍の 100 g 程度を 用いるので 現実の 取扱量 により近 く、本法の結果は実際的で信頼できる。

元来本法は爆薬よりも鈍感な物質に適用すべきもの でその取扱保安上の目安にすることができる。今回代 表的有機過酸化物と低ニトロ化合物等について実験す る機会を得たので報告する。

# 2. 試 験

大久保の法いかと全く同じ、およびブースター最のみを変更した方法で Fig.1 に示すように鉄管 (鋼管) JIS G-3452 SGP 25A (黒管) に装塡し所定の方法で起爆させる。その後管の膨張、開裂、寸断、破片重量、残薬量、燃焼、溶融の有無を観察、測定し試料が(A) 起爆されなかつたか、(B) 部分的に爆轟また爆燃したか、あるいは完全に伝爆したかを判定する。

(A) の場合は不活性試料(タルク、食塩、流動パラフィン)を対照として用いたときと同程度の変化を鉄管に発生したことであり、(B) の場合はより大きな変化を示したことによつて決めることとする。(B) 項中の爆燃の概念は明確なものでないので、これがどの程度の機械的破壊を来すべきかは判つきりしていない。しかしながらとにかく鉄管に明らかな変化が「回でも発生したときは 完爆の場合 と同一の カテゴリー(B) に含ませることにする。これは 不安定性物質取扱保安の観点より妥当である。

次に(A)と(B)を区別をするときに中間状態が出現して判定に苦しむことが起り得るのは他の感度試験法と同様である。判定には残存鉄管長、鉄管の膨張程度、開裂の有無、長さ、破片の大きさ、数、残薬の有無、煙、爆音等を観測し不活性試料の場合と差を検するわけである。このとき同一爆発を少くも3回以上繰返えすのが望ましい。所が不活性試料の場合との差

No.6 Detanator

No.9 Cork stopper

Booster

Specimen

JIS G3452 SGP 25A

o.d = 34.0 ±.2

No.9 Rubber stopper

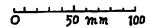


Fig. 1 Cross section of the tube

Table 1 Inititator charge

Initiator	Charge (g)	Ratio	
Detonator (No.6)	0. 4*	1	
Detonator (No.6) RDX 2 g	0.4+2.0=2.4	6	
Detonator (No.6) RDX 10g	0.4+10.0=10.4	26	

<sup>\*</sup> JIS K 4807 (1968)

が、この3回の間の差に近いときは判定が困難になる。このときは判定者によつて結果の異なることがあっても止むを得ない。落槌試験の場合も同様のことが起っている。

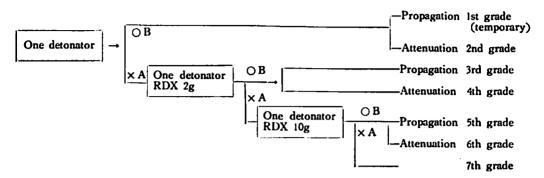
昭和45年4月23日受型

<sup>•</sup> 神奈川県平塚市新宿85 東京工業試験所第7部

本来この種の試験結果は統計的のものであるから正確には統計学的に処理することが必要で、たとえば up and down 法"がある。しかしこの方法は多数 (100回)の実験回数を必要とし実際的でないので、実験を容易にするためブースター薬量を大幅に変化させ同一爆発を3回繰返えした。(Table 1) 実験精度は悪

くなるが現在の目的には十分であろう。最大ブースター量は 10g としたが、より多量を必要とする鈍感な 試料の実験では本実験の呼称时パイプよりも太いもの が必要である<sup>60</sup> が試みなかつた。

システムを次に示す。



ここでは番号の若い程不安定性で危険度が大きいことになつている。1-3-5 あるいは 2-4-6 の間には問題はないが、2-3、4-5 の間では順序に考察の余地がある。起爆は起り易すくても伝爆しないならば被害の回数は多くても、小事故に止まる。

その一方起爆は起り難くても、一度起れば伝爆して 終い、従つて大薬量が爆発することになるので、被害 回数は少なくても、大きい事故となる。どちらが経済 的、心理的に統計として影響が大きいかは放出エネルギーの大小、工場自動化の程度、取扱所の立地条件、 法規的 および 社会的条件も 考慮して 決まることである。これらの条件は一義的に決められないのでここでは 1~7級のように示したわけである。

工業用ダイナマイトは仮称 1 級、鋳造 TNT は仮称 3 級に属する。実験実施の順序としては必ずしも上表の矢印の順に行なう必要はない。その場合「B」が異

Purity calc, from active oxygen (%) Structual formula Name Water (%) K. F. method Benzoyl peroxide can not be 99.0 co.o.o.co applied. CH<sub>2</sub> CH: \*\* Methylethylketone-98.1 " peroxide\* (55% solution) C2H5 C.H. C11H2-CO-O-CO-C11H2 Lauroyl peroxide 98.7 " CH2-N-CH2 Dinitrosopenta-0.5 CH- N-NO methylenetetramine ĊH2--ċH₂ NO<sub>2</sub> Dinitronaphthalen\* 0.2 NO<sub>2</sub> -NO2 Dinitrotoluene\* 0.1 NO<sub>2</sub>

Table 2 Chemical formula and purity

<sup>\*</sup> Samples used were commercial products which cotained many isomers.

<sup>\*\*</sup> An example of formula is given.

なつた ブースター 量で同様に得られたときは severe の方向に結果を採るべきで、このように決めておけば 実験類序が変わつても差支えない。

本実験に用いた試料の水分をカールフィッシャ法、 有効酸素分をヨード滴定法で定量した結果を Table 2 に構造式と共に示す。ただし構造式は代表的なものを 採つた。異性体は大抵の場合、多量に混在していると 考えてよい。

#### 3. 結果と検討

結果を Table 3, 4 に示す。 等級 を Table 5 に示 す。本成績に仮称が付してあるのは本法の感度表示法 が従来ないからである。

起爆の判定は前述の通りであるが、鉄管の太さ、材質、熱処理が異なれば起爆状況が変わり、感度表示値も従って変わつてくることは十分予想できる。 また伝爆の有無は管全長に変形が起ったか否かであるから、非定常的伝爆の場合管長によって伝爆についての測定結果が左右されることは十分考えられる。しかしこの試験は実用的に限界を求める試験であるから一応試験の仕様を決定しておかねばならない。厳密な意味での爆轟、爆燃、燃焼、伝爆等の有無を鉄管破壊の状況のみから判定することは必ずしも容易でない。現実的にはこの試験の仕様に従って起爆、伝爆を逆に定義することになる。

この非論理性は落槌感度試験, 摩擦感度試験における爆否の判定にも同様に伴うものである。

爆薬について起爆性、伝爆性が装塡比重、粒度、退度によつて影響されることは周知である。本試験の試料についても恐らく同様であろう。ジニトソペンタメチレンテトラミンとジニトロナフタリンにつき30%の装塡比重の差で試みたが、影響は認めなかつた (Table 3)。一つにはブースター薬量の各段階の差が大きいために蔭蔽されたのであろう。ブースターに RDX (ヘキソーゲン)を用いたのは大人保? に 従つた ので、PETN、Tet でも同じ結果を示すであろう。

試料の粒度については検討していない。試料はメーカーより 送付 されたものをそのまま用いた。 ただし ジニトロトルオールは 鋳造物 であつたので、 粉砕した。

温度が高ければ起爆伝爆共に容易になると考えるのが普通である。これについて検討するために常温(10~15℃)で実験した(Table 4)外、-20℃に24時間以上、および40℃に12時間以上保存し、使用直前に1本宛取出して手早く起爆部(雷管と RDX)をとりつけた

試料はラウリル酸過酸化物とジニトロナフタリンの みである。Table 4 に示すように差が認められた。こ の程度の温度差では大差を示さないが、発火点近くでは当然さらに鋭感になるだろうから、燃焼中では加熱が表しく鋭感であろう。

このことは一般的に言えることである。

低温の実験の際には鉄(銅)が脆性破壊しやすいために、不活性試料(タルク、Table 3, 4)を用いたとき破壊程度が常温と低温で甚しく異なつていることが判る。低温の破片は延びが少なく、厚いままで開裂している。温度差によつて破壊強度が甚しく異なるのでダミー(不活性試料)を用いた対照試験は必ず実施する必要がある。

ダミー(不活性試料)に何を採用すべきかについて は特に実験を行なわなかつた。試験すべき試料と物理 的性質(硬度、空隙率、粒度等)が等しいものが理想 的であろう。しかし Initiator 最が 大幅の段階差をと ればあまり神経質になることもない。

十分感度のよい 爆薬では 爆轟状態が 定常的に成立 し、反応進行中の伝熱、物質の拡散を無視して比較的 簡単な数学的解析ができているが、この実験のように 非定常爆轟または爆燃が起つていると思われる場合の 計算は極めて複雑で厳密には殆んど不可能である。

原理的には分解熱と損失熱のパランスがとれず不安 定になり圧力蓄積により、衝撃波の生成になつて行く 経過の中途の状態と思われる。薬額によつては、例え ばジニトロソペンタメチレンテトラミンのように鉄管 が完全に小さな破片になつたことは完全爆轟している としてよいので、このような場合は従来の爆轟理論で 処理できるであろう。

そうでない場合でも物質の逸散がなく、熱損失のみならば Frank-Kamenetsky, Rice® 流の計算が適用できる。物質の逸散が伴う場合は取扱が困難になる。ここではこの踉蹌に立ち入らない。

次に鉄管破壊の面より内圧を検討する。材料力学の 教科書に従つて薄肉円筒の内圧による破壊の式は<sup>9</sup>

$$p = \frac{2\sigma t}{d}$$

ρ は内圧、d は直径 (3.2 cm)、l は肉厚 (0.32 cm)、σ は引張り応力で JIS G 3452 の 30kg/mm² の最低規格値を入れると、p=600 kg/cm² となる。なおこれまでの経験で同一規格の管でも、購入の度に同じプースターによる破壊の状況は大きく変動することを知つたので、引張り破壊強度に相当の差があると 想像される。

一方、材料強度は静荷重と衝撃荷重では異なり、安全に設計する立場で4倍を要する100としている。破壊の面から見ると必ずしも4倍でないかも知れない。文

Table 3 Initiation and propagation at room temperature (10~15°C)

Sample	Weight	Initiator	Result	Observation		
NaCl	128	One detonator RDX 2 g	×(No)	the end: 34 mm $\phi$ (original diameter) to 39 mm		
"	118	<i>"</i> "	×	The same as the above, the diameter (38.0 mm $\phi$ ) after initiation		
Parashn	90	One detonator RDX 2 g	×	The same as the above, the diameter (36.5 mm $\phi$ )		
Talc	75	One detonator RDX 10g	×	The half of the tube in length was split into five flaps of 70 mm length. The ends of the flaps were connected to the original tube which did not show any change.		
Benzoyl peroxide	65	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: 34.5 mm \(\phi\). No material was found inside the tube.		
"	"	"	У	The same as the above.		
"	"		×	The same as the above.		
"	"	One detonator RDX 2 g	×	Expansion of the tube was found at both the ends. Diameters of them were 40 mm $\phi$ and 38.5 mm $\phi$ .		
"	"	"	(v <sub>0</sub> )			
,, .	"	"	0	Ninety percents of the tube in length was widely opened in a fan shape.		
Methylethylketone- peroxide 55% Dimethyl phthalate	II I	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: 36.5 mm $\phi$ . No material found inside the tube.		
45% (Liquid)	<b>′</b>		1.	The same as the above		
"		"	×	The same as the above		
"	",	One detonator	lâ	The same as the above		
<i>"</i>	·	RDX 2g				
<i>"</i>	"	"	0	Three splits (85 mm, 28 mm, 28 mm) were formed along the expanded tube.		
"	"	<i>"</i>	0 .	Four flaps (77 mm in length) were generated. They were connected to the tube whose length was reduced to 118 mm.		
Lauroyl peroxide	65	One detonator RDX 2 g	×	Expansion of the tube near the end: $34 \text{ mm } \phi$ (original) to 37.8 mm $\phi$ . Length of the remained powder column was 88 mm. Rubber stopper remained.		
"	"	"	×	Expansion: 39.5 mm $\phi$ . Length of the remained powder column was 65 mm.		
"	"	"	×	Expansion: 39.5 mm $\phi$ . Asplit of 20 mm in length was formed along the tube. Length of the remained powder column was 65 mm.		
<i>"</i>	"	One detonator RDX 10 g	0	Six flaps of 125 mm in length were formed. Fify-two mm length of the tube remained. No powder was found.		
"	"		×	Six flaps of 100 mm length were fomed. Eighty-one mm of the tube length remained. No powder was found.		
<i>"</i>	"	<i>"</i>	×	The same as the above excepting the [remained length of the tube was 86 mm instead of 81 mm.		
Dinitrosopenta- methlene- tetramine	81	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: $34 \text{ mm } \phi$ (original) to $36.0 \text{ mm } \phi$ , powder column of 119 in mm length remained.		
	"	"	×	Expansion: 36.0 mm $\phi$ , powder column of 140 mm length remained.		
"	"	"	×	Expansion: 36.0 mm $\phi$ , powder column of 125 mm length remained.		
"	69	One detonator RDX 2 g	0	Thirteen fragments of 2 g to 99 g weight were re- covered. The longest fragment was 180 mm in length.		

Sample	Weight (g)	Initiator	Result	Observation
Dinitrosopenta- methylene- tetramine	81	One detonator RDX 2 g	0	Ten fragments of 3 g to 37 g weight were recovered. The largest one was 125 mm in length and 40 mm in width.
"	69	"	0	Thirteen fragments of 3 g to 37 g were recovered. The largest one was 170 mm in length and 20 mm in width.
"	81	"	0	Twenty-one fragments of 2 g to 39g were recovered. The largest one was 170 mm in length and 20 mm in width.
Dinitronaphthalene	71	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: $34 \text{ mm } \phi$ (original) to $35.0 \text{ mm } \phi$ , powder column of $58 \text{ mm}$ in length remained. The inner surface of the tube and the surface of the column end were covered by soot.
<i>"</i>	"	"	×	The same as the above, powder column: 70 mm
<i>"</i>	"	"	×	The same as the above, powder column: 73 mm
"	72	One detonator RDX 2 g	×	Expansion: 40 mm $\phi$ , powder column: 80 mm. Much soot was formed. Powder was pushed out 10 mm.
"	91	"	0	A split of 45 mm in length was formed, expansion: 54 mm φ
"	69	"	0	An opening of triangle (50×mm×50mm×50mm) was formed at the end of the tube. Powder column: 60 mm Much soot was formed.
"	84	"	0	Six fragments of 5 g to 75 g were recovered. The tube of 64 mm in length remained. Some powder remained.
"	60	One detonator RDX 10 g	0	Eighteen fragments of 1 g to 65 g was recovered. These fragments were covered with soot.
"	"	<b>"</b>	0	Twenty-two fragments of 1 g to 118 g were recovered. These fragments were covered by soot.
<i>"</i>			0	Twenty-three fragments of 2 g to 119 g were recovered. These fragments were covered by soot.
Dinitrotoluene	100	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: 41 mm $\phi$ , powder column of 110 mm remained. Much soot was found inside the tube.
"	"	"	×	Expansion: $36 \text{ mm } \phi$ . Powder column: $130 \text{ mm}$ . Soot was found.
<i>II</i>	"	"	×	Expansion: 39 mm $\phi$ . Powder column: 110 mm. Soot was found.
"	"	One detonator RDX 2 g	0	Thity-nine fragments of one g to 21 g were recovered. The longest one was 111 mm in length.  The widest one was 25 mm in width.
"	"	"	0	Sixteen fragments of 1 g to 85 g were recovered. The longest was 180 mm in length, the widest was 30 mm in width.
"	"	"	0	Fourteen fragments of 2 g to 86 g were recovered. The longest was 180 mm in length, the widest was 22 mm in width.

Table 4 Effect of temperature difference (-20°C to 40°C) on initiation and detonation propagation of lauroyl peroxide and dinitronaphthalene

Sample	Weight (g)	Initiator	Result	Observation
Talc (-20°C)	74	One detonator RDX 2 g	×	One flap of 61 mm in length connected with the tube whose remained length was 138mm. One split (30 mm) formed. Talc and a rubber stopper remained.
Talc (-20°C)	"	One detonator RDX 10 g	×	Four flaps of 70mm connected with the tube whose remained length was 110mm. No tale was found.
Talc ( 40°C)	"	One detonator RDX 2 g	×	Expansion of the tube near the end: 39mmø

Sample	Weight (g)	Initiator	Result	Observation
Lauroyl peroxide (-20°C)	60	One detonator RDX 2 g	×	Expansion: 39. 5 mm\(\phi\), one split of 28mm, Powde column of 80 mm remained.
"	"	"	×	Expansion: 42.0mmø, one split of 18mm in length powder column of 90mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 43mm $\phi$ , three split of 15mm in length powder column of 90mm in length remained.
"	"	One detonator RDX 10 g	×	Four flaps of 70mm in length and 25mm in width connected to the tube whose length was 110 mm in length. No powder was found.
"	"	"	0	Two flaps of 65mm in length and 30mm in length connected with the tube whose length was 37mm. Two fragments were found.
"	"	"	0	Two long flaps (92 mm×20 mm) and three shor flaps connected with the tube whose length wa 69 mm. One large fragment was found.
″ (40°C)	"	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: 34.5 mm¢ Powder column of 120 mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 35.0 mm\(\phi\), powder column of 130 mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 34.0mm¢, poder column of 130mm i length remained.
"	"	One detonator RDX 2 g	0	A large fan-type opening (50mm×50 mm×40mm was formed. Powder column of 110 mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion of the tube near the end: 43mmø. Or split of 28 mm in length near the end. Powde column of 110mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 40.5 mm, No split, powder column of 100 mm in length remained.
Dinitronaph- thalenc (—20°C)	71	One detonator	×	Expansion: 34.3mm $\phi$ , powder column of 125mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 34.5mm $\phi$ , powder column of 130mm in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 34.5 mm\(\phi\), powder column remained.
"	"	One detonator RDX 2 g	0	Four flaps. Length of the remained tube was 13 mm. Powder column of 120mm in length remained Somewhat sooty. One fragment was found.
"	"	"	0	Three large flaps. Length of the remained tub was 131 mm. Powder column of 120mm in lengt remained. Sooty.
"	"	"	0	Two large flaps, length of the remained tube wa 128 mm. Powder column of 110 mm in lengt remained. Two fragments were found. Sooty.
" (40°C)	60	One detonator	×	Expansion of the tube near the end: 34.5 mm/s/Powder column remained was 120 mm.
"	"	"	×	Expansion: 35.0 mmø. Powder column of 130mi in length remained.
"	"	"	×	Expansion: 34.0 mmø. Powder column of 130mm in length remained.
"	"	One detonator RDX 2 g	0	Two flaps of 40mm in width and 50mm in lengt connected to the tube whose length was 150 mm Sooty.
"	"	"	0	Four flaps of 35mm in width and 65mm in lengt connected to the tube whose length was 124mm
"	"	"	×	Expansion of the tube near end: 52 mmø. On split of 32 mm in length. Sooty.

Table 5 Sumary and Grade

Material	One No. 6 detonator	One No.6 detonator + RDX 2 g	One No. 6 detonator + RDX 10 g	Grade
Benzoyl peroxide	0/3	(2+0)/3		4
Methylethyl ketone peroxide 55% Dimethl phthalate 45% (Liquid)	0/3	(2+0)/3		4
Lauroyl peroxide	0/3	0/3, $0/3$ , $(1+0)/3$	(1+0)/3, $(2+0)/3$	6, 6, 4
Dinitrosopenta- Methylenetetramine	0/3	(0+4)/4	ļ	3
Dinitronaphthalene	0/3, 0/3, 0/3	$\frac{(3+0)/3}{(2+0)/3}$	(0+3)/3	4, 4, 4
Dinitrotoluene	0/3	(0+3)/3		3

(No. of case of initiated and not propagated

+ No. of propagated case through the total length of the tube

Fraction means:

No. of test

Under line means: Tested at -20°C Overline means: Tested at 40°C No-line means: Tested at 10°C

献いにより

$$\left(\frac{$$
衝撃応力 $\right) = 1 + \sqrt{1 + \frac{2h}{\lambda_a}}$ 

λ. は静荷瓜による変形、A は衝撃印 加速度を 自由落 下高で表わしたものである。

これらの式が爆燃のような相当早い現象に適用できるか、発生熱が鋼管に伝わりその材料強度を減じないかについて不明の点が多いが、何れにしても衝撃的とすれば前述の 600kg/cm² の破壊限界より低い内圧値を採用すべきである。

#### 4. 結 語

本鉄管試験は次のようである。(1) 実施に爆発実験 設備を要すること。(2) 精度よき実験値を得るために は多数の爆発回数を要することが不利な点だが。(1) 本実験程度の特度ならば定量的に得ることは容易で。 (2) 試料の量が多い点で現実的に意味の大きい結果を 得る。(3) 特別に高価な測定装置を要しない。

本試験に用いるような強い衝撃 (特に RDX 10g 使用時)が現実に、これらの物質取扱時に起り得るかについては即答はできない。勿論常時起こつている筈はないが、事故が予期できない諸因子が重なつて起きることは従来の経験の示す所である。例えば不測の加熱現象があつたときに衝撃が重なる、あるいは発火燃焼中に重量物の落下がある等の場合に起爆を惹起する条件が成立しないとも限らない。

元来保安対策は有り得る状況を十分考慮すべきである。RDX 10g の爆姦衝撃が現実に 極めて稀であると

は言い切れない。鉄管試験に代替すべきよりよい試験 法が現在ない以上、Table 5 はこの危険物取扱上の目 安として極めて有意義であつて、さらに他の危険物に . ついても同様な数値を求めて行くことが望ましい。

付記 本実験用試料入手、結果発表に関し東大工学 部難波桂芳教授の御厚意を得た。また伊藤功一氏(日 本カーリット K.K.)外の助官もあつた。分析につい ては当所推野和夫技官の助力を得た。ここに謝意を表 する。

# Literature

- 1) 大久保正八郎, 飯田稔, 工火誌, 24, 329 (1963)
- 2) 大久保正八郎, 饭田稔, 工火站, 27, 101 (1966)
- D. C. Noller, D. J. Bolton, Anal. Chem., 35, 887 (1963)
- J. B. Armitage, H. W. Strauss, Ind. Eng. Chem.,
   No.12, 28 (1964)
- 5) 北川宏, 津田武夫, 中島義弘, 小山田盛方, 安全 工学, 4, 131 (1965), 7, 171 (1968)
- H. Kenen, K. H. Ide, K. H. Swart, Explosivstoffe, 9, 1 (1961)
- K. A. Brownlee, J. L. Hodges, M. Rosenglatt, Amer. Statistical Assoc. J., 48, 262 (1953)
- 8) O. K. Rice, J. Chem. Fhys., 8, 729 (1940)
- 9) 機械設計ハンドブック編集委員会編, 機械設計ハ ンドブック, 3-2 (昭30) 共立出版
- 10) 同上 1-12

# Initiation Test of Some Peroxides and Others in Steel Tubes

by Jojiro Mizushima and Yukio Tanaka

Initiation tests of benzoyl peroxide, methylethylketone peroxide, lauroyl peroxid, dinitrosopentamethylenetetramine, dinitronaphthalene and dinitrotoluene in "1 inch" steel tubes of 200 mm in length showed that sensitivity and propagation trend of ex plosion of these unstable substances could readily be estimated by observing deformation or breakage of the tubes. The deformation or breakage of the tubes was compared with those of the tubes in which inert materials were loaded. The initiators were (1) a No. 6 electric detonator, (2) a No. 6 electric detonator and RDX 2g and (3) a No. 6 electric detonator and RDX 10g. Tables 3 and 4 show observation of the tubes. According to the sensitivity and propagation trend the above six materials were classified (Table 5). These figures are useful information in handling these materials, especially because of a large quantity of the materials tested. The quantity (100 g ca.) is not so far from the real quantity of daily handling while the quantities in the friction test and the percussion test are of the order of tens of milligram.

(The Government Chemical Iudustrial Research Iustitute, Hiratsuka. Japan)